

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第十一卷 「人文科学（一の一）」

西洋哲学、アブラハムの宗教および西洋史、西洋の地理

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第十一巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、西洋哲学、アブラハムの宗教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）および西洋史、西洋の地理に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 ○歳々十九歳

第二編 二十歳々二十九歳

西洋的「自我」と東洋的「真我」 1（森鷗外の葛藤）

西洋的「自我」と東洋的「真我」 2（星の命、花の心）

西洋的「自我」と東洋的「真我」 3（幻肢とミラータツチ共感

覚）

西洋的「自我」と東洋的「真我」 4（どちらを抱きしめるべき

か）

西洋的「自我」と東洋的「真我」 5（脳機能局在論の疑わしき）

西洋的「自我」と東洋的「真我」 6（共感覚と宇宙と東洋思想

の話）

実はあつた「共感覚」至上主義らしきもの（ドイツなど）

第一部

西洋哲学と現代日本社会と私

西洋哲学と現代日本社会と私

第一章 昨今の国際情勢と西洋哲学の役目

ニーチェ研究者の現状と第三のニーチェ哲学

飽和した西洋学術の打開欲求 絵画と音楽

量子論、宇宙論、不完全性定理

神保町

米国一強の終焉と中国の台頭時代における西洋哲学

黒人差別、白人至上主義、「イエローモンキー日本人」

西洋哲学観察史

多神教からフィロソフィーへ

太古の昔

哲学と科学

ギリシャの自然哲学と宇宙論

ソクラテス、プラトン、アリストテレス

キリスト教哲学の席巻

トマス・アクィナスとスコラ哲学

デカルト

スピノザと汎神論

カント

ヘーゲルと歴史

フイヒテ、シェリング

コントと社会学

ショーペンハウアー、キルケゴール

フロイト、ユング

マルクス、エンゲルス 神から人へ	
ニーチェ哲学の特殊性	
ニーチェ精神とヒトラー	
フッサール、ベルクソン	
プラグマティズムと新宗教	
ヴェーバーと資本主義	
ラッセル、ホワイトヘッド	
ヤスパース	
ソシュール、ウイトゲンシュタイン	
ハイデガーの存在論	
サルトルとヒューマニズム	
レヴィナス	
メルローポンティ	
レヴィストロース	
ラカン、ガタリ、デリダ	
フリーコトとエピステーメー	
クリプキ	
サンデル、バトラー	
第二部 「生（せい）の哲学」	
第三部 ビン・ラディンにとっての神「アッラー」	
第四部 中村雄二郎	
第五部 ニーチェ	

第三編 三十歳～三十九歳	
第一部 剣を持たずペンで書いてみるだけの私のイスラム観	
第二部 「ISIS（イスラム国）」の呼称論争について思うこと	
第四編 四十歳～四十九歳	
第五編 五十歳～五十九歳	
第六編 六十歳～六十九歳	
第七編 七十歳以降	
第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの	
第九編 著作権者が岩崎純一であるもの	

第一編 ○歳〜十九歳

編纂中。収録を待たれよ。

第二編 二十歳〜二十九歳

西洋的「自我」と東洋的「真我」 1（森陽外の葛藤）

二〇〇九年五月十四日 起筆、擱筆、公開

僕は、都内のある寺で、人前で共感覚についてのごく簡単な講演をしたことがあるのだが、それ以前からずっと仏教その他の日本・東洋思想には関心があつて、共感覚探究にも取り入れていた。と言うより、共感覚探究と哲学的探究とが入り混じっているのが、僕のサイトなりブログの書き方の特徴なんだと思う。常々、仏教関係の人たちと共感覚を語ってみたいと思つてはいるが、今のところはその寺の住職さんと、居残つて話したのが最後だ。少しはモノの考え方が違つたが、しかし共感覚がどういふものなのか根本的に理解されたというのには、確かに感じた。それこそが、まぎれもなく仏教者の力だと感じた。

宮沢賢治や松尾芭蕉など、共感覚者だっただろうと言われる人は日

本人にもたくさんいるが、今回は共感覚と言うよりは、共感覚を自覚している「我」や「自我意識」について考えようと思う。

先日、これまた共感覚的思考の持ち主だっただろうと僕が思う森陽外の『妄想』を読んでいたら、次のようなことが書いてあつた。

（引用始め）

（西洋の小説は、）どれを読んで見てもこの自我が無くなるということは最も大なる最も深い苦痛だと云つてある。ところが自分には単に我が無くなるということだけならば、苦痛とは思われない。只刃物で死んだら、その刹那に肉体の痛みを覚えるだろうと思ひ、病氣や薬で死んだら、それぞれの病症薬症に相応して、窒息するか痙攣するとかいふ苦しみを覚えるだろうと思ふのである。自我が無くなる為めの苦痛はない。

西洋人は死を恐れないのは野蠻人の性質だと云つてゐる。自分は西洋人の謂う野蠻人というものかも知れないと思う。

しかしその西洋人の見解が尤もだと承服することは出来ない。そんなら自我が無くなるということに就いて、平気でいるかというに、そうではない。その自我というものがある間に、それをどんな物だとはつきり考えても見ずに、知らずに、それを無くしてしまうのが口惜しい。残念である。漢学者の謂う醉生夢死というような生涯を送ってしまうのが残念である。それを口惜しい、残念だと思つと同時に、痛切に心の空虚を感じる。なんともかとも言われない寂しさ

を覚える。

（引用終わり）

森鷗外の言っていることは、実によく理解できる。しかも、安心させられる。それはどうしてかと言うと、たぶん僕も野蛮人だと言えそうだからだ。なぜかは分からないが、僕は子どもときから、死ぬことへの恐怖とは、物理的な苦痛・苦悩への不安や興味・好奇心から来るものであつて、「自我」・「自分が自分であるという自覚」がこの世界から無くなることについては、残念だとか、嫌だとか、怖いとか、そういうことを思ったことがない。自分がどんな状況で死ぬかとか、自然死なのか自殺なのかといったことには確かに「興味」はあるけれども、今の自分（自分以外の他者に対して実在するこの「自分」、サルやイルカや虫とは違うこの人間としての「自分」）が世界から消滅する、ということについては、恐怖という感情は覚え、なぜか好奇心しかない。ただ単に、自分が死んだら、自分の肉体を構成していた分子・原子が、巡り巡ってその辺の近所の道ばたの石ころや花を構成するんだろうなあ、と思うくらいだ。こういう僕の「人生感覚」は、僕の共感覚と深くかかわっているに違いない。

僕は、森鷗外や宮沢賢治という人たちは、極めて「普通の男」だ、わあ、僕と一緒にだなあ、などと、中学校の国語で学んだときに思ったのだが、大学に入ってデカルトやヘーゲルを読んでその内容に驚愕・絶望した。たぶんそれは、森鷗外の感じた衝撃、もつと言うと、

明治時代に日本人男性が初めて「自我」を知ったときの衝撃と同じだと思う。僕は、「17歳で哲学書なるものを初めて真剣に読んで以降、西洋哲学では、実存哲学、特にニーチェだけは東洋哲学・仏教の理解者として引き入れても良いと現在まで思っている。しかし、その思想とて、宮沢賢治には及ばない。般若心経にも及ばないと今でも思う。さらに、今の日本の脳科学者や心理学者の人間観は、実存哲学にも及ばないと思う。なぜならば、最近、毎日のようにテレビに出ている脳科学者をはじめとして、この人たちにとっては、「自我意識」をどう記述するかが最大の関心であり、かつその記述を脳という器官に一党独裁的に求めるもので、「自我」の実在と、「自我」の産出源の物理的な特定の可能性の、両方を疑っていない。これはある意味、脳科学を非科学的に信仰する人にしか成し得ないことである。「自我」や「心」について、心臓や肝臓や筋肉や骨など、脳以外の器官がモノを言える立場はどこにも無い。

かつては、「呪術」が「科学」であった時代があつた。今の科学からすると、それは虚妄であるとか、未開人・野蛮人の迷信ということになる。しかし、今の科学も、いずれは「我々人類がまだまだ未熟だった頃の、『20世紀の迷信』と言われる時代が確実に来るに決まっている。ちなみに、哲学者の木田元氏は、「西洋において、仏教や江戸時代までの日本が持っていた世界観を探そうと思つたら、ソクラテスよりもまだ前に戻らないと見当たらない。西洋人は、仏教的な世界観をすでに紀元前に失った。」という内容のことを述べている。

僕はいつも、「どうして自分は、年間三万人を超える日本の自殺者を簡単に非難する社会もおかしいと思うが、自殺者の自殺のあり方もおかしいと思うのだろうか」とか、「最近個性が大事だ、と言うが、本当にそうか」などと考えるのだが、おそらく、「近代の西洋的自我」に生きることが「生きること」で「近代の西洋的自我」を消すことが「死ぬこと」だという発想から抜け切れていない点、あるいは「個性が大事か、集団が大事か」という議論がそもそも自我の实在の前提の上で行われる議論であることに気付かない点において、両立場は同じ穴の貉である、ということに片時も納得が行かないのだと思う。

おそらく、今の我々日本人のほとんどにとっては、「自我」がなくなるといふことへの「残念さ」や「恐怖」というものが、「生死」を考える上での中心課題なのかもしれない。だから、「自我」の实在といふのは、すでに前提になっていて、それが有るか無いかという二項対立が直接的に死への恐怖につながっているのだと思う。

僕は今まで、共感覚関連で、重度の自閉症者に出会ったが、この人たちにはおおよそ「自我」というものが自覚されていない。しかし、「真我」ないし「無我」なら「健常者」よりも（そして、僕よりも）分かっている、ということが僕にはよく分かる。僕ほどの共感覚を持って生きている男性を探していくと、どうしても自閉症者・知的障

害者の中からしか見つからなかったが、ともかく彼らの中には、僕よりも動物のオスに近い知覚世界を持っているだろうと思える男性が確実にいる。僕は子どもの頃から、確固たる「個」や「我」に生きる周りの男性よりも、なぜか動物のオスと話を通じるなあ、などとおぼろげに感じていたが、それが決して間違っていないかったことを教えてくれたのは、これらの男性の存在であると思う。

共感覚を持っていると、個性だと言って褒めてくる人がいるけれども、僕はそれさえも気持ち悪く感じる。怒りはしないけれども、寂しいと感じる。女性の排卵を感じする能力が個性だと言われたのは、それをオスの普遍だと実感している僕や動物のオスは、どうしようもない。それこそ、そういう西洋的自我に基づく褒め方について、「口惜しい、残念だ」と思うと同時に、痛切に心の空虚を感じる。なんともかとも言われない寂しさを覚える。」

### 西洋的「自我」と東洋的「真我」2（星の命、花の心）

二〇〇九年五月十七日 起筆、攔筆、公開

NHKの「爆問学問」という番組をいつも見ているが、京都大学での特集の回に、学生の前で爆笑問題の太田光氏が、「金星が自分の意志で太陽の周りを公転していないと誰が言えるか」、「僕は神を信じな

いけれども、金星が生きていることは信じる」といったことを述べたとき、エックス線天文学者をはじめ理系研究者のほとんどが「議論にならない」と言つて、「生命」と「非生命」の間には確固たる断絶があるとの観点から終始太田氏の世界観全体に理解を示さなかった。このやり取りは非常に興味を持って見ていたのだが、僕は太田氏の世界観・宇宙観こそ、注目に値すると思つた。太田氏をフォロ―した理系研究者は、最後の若いシステム生物学者だけだった。

<http://www.youtube.com/watch?v=L7cPFgGqrsU>

（5分00秒くらいから見ると良いですが、金星の意志の話は、8分00秒から。）

この攻防は、一見すると、「主観と客観」、「非科学と科学」、「素人と玄人」といった議論に思えるが、そんな生易しいものではなく、根底にあるのは「太田氏の東洋的自我（真我）」と科学者の西洋的自我との攻防なのだという気がする。太田氏は、「自然科学というのも、結局は現代の科学者の主観が、偶然にも99%の健全者に当てはまったがゆえに客観的真理と見えているものに過ぎない」ということを言いたかつたと思う。自然科学を否定しているのではない。自然科学も、近代以降の健全者の主観に過ぎない、ということだ。「自然科学は世界最大の宗教である」という僕の考え方と全く同じことを、テレビで堂々と言っている芸人がいるということに、いつも安堵と

興味を覚えている。

僕が東大に通っていた頃、ある生物学の教授と会話していて、何かの拍子に、そばにいた女子学生が、「私は花には心があると思う」と発言した。そうしたら、その教授が、「花に心があるなんて言う女はバカだ」と、冗談半分、本気半分というニュアンスで返した。一瞬、悲壮感がただよったが、その空気の変化を感じていないのはその生物学者だけであるという現実には、何とも言えない寂しさを覚えた。

また、これもある東大の理系の学者から二年前の六月に相談されたことなのだが（印象深かつたので時期も内容も完璧に覚えている）、「自分の〇歳の子どもが、“泣”という漢字を見て、漢字が泣いていると言ふ。“泣”という漢字が“cry”を意味する記号であるというのがまだ分からず、“泣”自体が泣いている感じがする、と言ふ。うちの子どもは病気でしようか。」というものだった。実に寂しい質問だと感じた。この学者も、先の生物学者も、自身の専門分野については驚異的な知識のもとに何時間でも語れる方である。しかし、「星が生きている」とか、「花に心がある」とか、「漢字や平仮名を見て、感情がある感じがする」と言ふ子どもを見ると、とたんに「病気」や「障害」を持っていると判断する。ご当人たちは本気でそれを信じており、「人間とそれ以外」、「生命と非生命」といった区別は絶対的なもので、それを疑う人は脳に問題があると見ている、というのがひしひしと伝わってきた。

自閉症者のテンプル・グランディンという女性の著書は、共感覚者の間でもよく知られている。『自閉症の才能開発』という本の中に、次のようなすばらしい箇所がある。僕がサイトやブログで主張しているのと同じことを言っている。

（引用始め）

ある尊敬されている動物科学者が、動物は考えないと私に言ったとき、もしそれが本当なら、私には考える能力はないと結論づけなければならぬと私は答えた。彼は絵で考えるということが想像できなかつたし、それを真の思考と認めようとしなかつた。言語で思考する人たちの多くが理解できない思考世界を私は持っている。動物に考える能力があることを信じない人たちは、だいたい言語で考え、視覚化スキルの貧しい人たちである。彼らは話し言葉の能力や連続的思考に優れているが、写真を判読することはできない。

動物はきつと映像や、においや、明かりや、音のパターンの記憶で考えるのだと思う。実のところ、私の思考パターンは、言語で考える人間たちのそれよりも、動物の思考パターンに似ている。動物に考える力があるのかどうかを議論すること自体が、私にとってはばかばかしく思える。

（引用終わり）

僕が接してきた性犯罪被害者女性・重度自閉症者・重度共感覚者の中には、「どこからどこまでが自分の体なのか」が分からなくなった人がいる。特に、性犯罪によって凶らずも幼少期の共感覚が蘇った女性は、例えば、本を持っているとき、手と本とがつながってしまった、本の先っぽまで自分の肉体であると判断してしまう。多くの場合、本を読んだり手放したり、といった日常行動には支障がないので、すぐに「本は私の体ではない」と気付くのだが、花に触れているとき、机に頬杖をついているとき、風に吹かれているとき・・・など、「それらも自分である」、「それらに自我が流れ出ている」と感じてしまう。それと反対に、自分の体の部位なのに、それが花や机や風のほうに属していると認識する場合もある。特に性犯罪被害者女性では、物理的に花や物体に触れていない部位であっても、被害を受けた部位ならば、それが自分のものではないと感じられる場合がある。我々は手の指を広げたとき、指の間には空気があって、その空間は「自分ではない」「自我が及ばない」と認識するが、これらの性犯罪被害者女性は、被害を受けた身体部位にも全く同じように「無い」と判断を下す。

脳卒中から復帰し、言葉を取り戻したジル・ボルト・テイラーという女性は、脳卒中の中の自分の世界認識を「涅槃」だと東洋的概念を使って表現した。この女性も、脳卒中の間は、自分と他の物体との境界がどこなのか、どこからどこまでが自我の及ぶ範囲なのか分からなかつたと言う。先のテンプル・グランディンという人は、



さらにここから、「これこそが動植物の知覚世界なのだ」と言ったわけだ。つまり、性犯罪被害者女性・重度自閉症者・脳卒中患者の世界認識には、同じことが起こっているのだ。いわゆる健常者だけが、動物として「異常な」状態で世界を知覚しているとも言える。

僕には、この女性たちや先の性犯罪被害者女性たちが何を言っているのかを理解できるが、このことを冒頭の天文学者や、先の生物学者に言葉だけで説明して理解されることは、ほとんど絶望的に思える。普段も僕は、理系研究者と接する際には、その女性たちの実感が本物であることを証明しなければならぬ。その一環として、僕が言語の面から実証しようとしたのが、サイトの「スラフオーリアの世界観（1）」の「性犯罪被害者女性の“自我突き放し共感覚”」だった。僕はむしろ、そういう人体観を全面的に許容することで、「性犯罪被害者女性や重度の共感覚者・自閉症者の知覚世界は、すでに東洋的・仏教的である」ということを言ってみたいと思ってきた。

僕がこういう性犯罪被害者女性や自閉症者にいつも言っていることは、「その部位が無いと思うなら、それでいい」、「手に持っている本にも自我が及んでいると感じるなら、それでいい」ということだ。「あなたの東洋的自我に、僕は全面的に賛同する」という心を通わせることが、一番そういう人を救うというのが、僕の考えだ。僕も、「女性の排卵や月経が、女性の自由意志とは無関係に起こっているとは言えない。そればかりか、他人の男性であるはずの僕の自由意志に

よって排卵していると思える女性が周りにいる」とサイトに書いた。（以下のアドレス参照。）

[http://www.ij-art-music.com/ronbun\\_ippan/chikaku3.pdf](http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/chikaku3.pdf)（パスワードはサイトのトップに掲載。）

<http://ij-art-music.sblo.jp/article/28533556.html>

そもそも、「自我」というものが、今の我々が自分の体だと思っている頭や手足・胴体の範囲にピタリと一致するようになったのは、西洋でさえルネサンス以降のことである。このことは、動物としては驚異的な社会現象だった。西洋ではソクラテスの時代からすでにそうだが、特にルネサンスというのは、人間が他の自然・動植物とは異なるという「西洋的自我の宣言」だった。だから、「自我」というのは、キリスト教の人間観と密接に結び付いて生まれた。「個人」「個性」「他人」といった概念もその時期に初めて生まれたし、同時に「健常者」「障害者」という概念も生まれた。さらに言うと、「自我」「自分」「自己意識」の位置は、今ではちょうど両目の少し奥、脳の前頭葉のすぐ下あたりにあるように感じられるが、この感覚も、日本人では江戸時代の終わりまで無かった。この頃の日本人は、「自分はどこにいるか」と聞かれたら、「胸だ」とか「肝（きも）だ」とか「臍（へそ）だ」などと答えた。

我々の体は、酸素・炭素・水素など、他の動植物や物体と同じ原子・分子でできているのであって、「自分」「自我」と「自分以外」「他我」とを明確に区別できる現代西洋人や現代日本人の世界認識は、動物としては極めて特殊な事態を呈している。今は、区別できないと社会生活が営めないから、「自我」の实在は当たり前のように思われているが、先のような性犯罪被害者女性・自閉症者・共感覚者の存在は、「自我」というものが、本当は西洋近代社会・キリスト教社会の一種の「空想」によってもたらされた人間観への「信仰」に過ぎないことをよく物語る。だが、爆笑問題の太田氏のように、健常者であつてもそこに気付ける人は、実に珍しいとしか言いようがない。太田氏は、僕が好きな西田幾多郎なども若い頃から読んでいたようだが、その姿勢は少なからず褒められるべきだと思う。

基本的に、僕のところに来る性犯罪被害者女性・重度自閉症者・重度共感覚者からの相談は、思わず心理カウンセラーなどに向かつて、「植物には心がある」、「子どもの頃、ぬいぐるみには命があると思っていた」、「星も生きていないんじゃないか」、「どこまでが自分か分からない」などと発言してしまつて、笑われたりバカにされたり、というケースが多い。つまり、冒頭の太田氏やこの僕のように、「自我」を疑つているという自分の実感をまさに「自我」によつて記述する、という、ある意味、巧妙な思考法ができず、そのために理系研究者や心理カウンセラーに言い負かされた人が、僕のところに来る。他者に反論したり、こうしてブログを書いたりするには、「自我」

がないとできない。ところが、先の僕のような実験は、よほど「自我の無い東洋的世界観」を実感として分かつている人にしか思い付かない。その両方ができる点で、太田氏も僕も、非常に珍しいタイプの人だと思う。

時々、リストカットがやめられないという女性から相談が来るが、先の性犯罪被害者女性と決定的に違うとも思うのは、リストカットという自傷行為が西洋的自我のもとに行われているケースがあまりにも多いと言うことだ。性犯罪被害者女性のように言語活動を失う、という段階に陥っているケースも少ない。つまり、自分の体がどこからどこまでか、というのは、はっきりと自覚していて、「自分を傷付ける」ということが目的なのだ。決して「自我」を疑つてはいない。

だから、僕は、多くのリストカット女性と先の性犯罪被害者女性とに対して別々の対応を取っている。性犯罪被害者女性のほうは、「自分から体の一部がなくなつた気がする。」と訴えてくることもあるかと思えば、「自分の身体ではないはずの花や星、風や水にまで自我が及んでいて、その美しさに耐えられない。虫や小動物が傷付けられると、それは自分が強姦されたのと同じことだから、パニックになる。」と訴えてくる。まるで、最低限の魚だけを採り、食べた後には魚の墓まで立てていた江戸時代までの日本人と同じようなことを僕に言うわけだ。そのたびに僕は感銘を受けるし、こういう人たちや

僕自身の知覚世界を、西洋的自我から少しも動こうとしない（と言  
うより、西洋的自我しか認識できなくなった）科学者の人たちに説  
明する方法を、何としてでも見つけてみせるという心が湧いてくる。

### 西洋的「自我」と東洋的「真我」3（幻肢とミラータッチ共感覚）

二〇〇九年五月二十四日 起筆、攔筆、公開

「幻肢」と呼ばれる症状がある。事故などで手足を切断された人が、  
その後も手足が実在するように知覚され、しばしば動かすことができ  
るといふもので、共感覚研究もしているラマチャンドラン氏の専  
門分野でもある。「幻肢」は、脳科学的には、手足（感覚器官）が失  
われても、脳のうち手足をつかさどっていた部位のはたつきがし  
ばらく残っているから、と説明される。痛み（幻肢痛）に長年苦し  
む人もいる。その感覚や痛みは、視覚上は何もない空中（手足のあ  
った位置）に知覚されたり、別の身体部位に再現されたりする（肩  
に指を感じる、など）。

<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/brain/brain/29-5/index-29-5.html>（ま  
ぼろしの腕）

[http://www.rehab.go.jp/rehanews/japanese/No263/8\\_story.html](http://www.rehab.go.jp/rehanews/japanese/No263/8_story.html)  
（幻肢の感じ方の種類など）

一方、「ミラータッチ共感覚」は、サイトに書いたように、他人や物  
体・自然物に、手を触れずして触れることができたり、しばしばそ  
れらが自分の身体であると知覚される現象である。そのため、他人  
が体に傷を受けると、自分にもほとんど同じ痛みが感じられる代わ  
りに、逆に他人が快感を得ると、自分にも全く同じ快感が生じる。  
つまり、「身体部位の欠落」を要因とする「幻肢」と反対に、「身体  
部位の加算」を要因とするのが「ミラータッチ共感覚」と言える。  
男性の場合、人間では女性のみに対して生じることがあり、僕以外  
にも何人か報告者がいる。しばしば、女性の様々な体内現象を「自  
らの体内現象」のように把握できる。つまり、女性の排卵や月経は  
「他人事」ではない。僕らミラータッチ共感覚者男性は、そういう  
中で仕事や日常生活をしている。

しかし、一方が「欠落」で一方が「加算」と映るのは、現代の99%  
の人の実感（「自分・自我」Ⅱ「自分の身体（まさにこの肌色をした  
私の全体）」を基準として例外の人を解釈するからであり、ここで  
発想を変えて、「元々「自分・自我」の起源と言うのは「大自然の全  
体」であり、そこから西洋近現代的な自我に不必要な部位（他者や  
他の動植物・自然）を人類（ホモ・サピエンス）だけが急速に切り  
落としていって、最後に残ったのが、今の「人間」という概念であ  
る」と考えてみれば、今の先進国の健常者の身体感覚や自我という  
のは、他の動物に比べて「壮大な欠落」「動物史上最大の幻肢」とも

見なしうる。そして、それは、僕や他のミラータッチ共感覚者の実感にピタリと合っている。

逆に、「脳」のみ、あるいは、五感のうち最大の感覚である視覚を生み出す「眼」を、今や「自我・自分の物理的位置」と見なせば、我々の手足というのは、脳や眼による幻肢・ミラータッチ共感覚であるとも見なせる。

そうなると、手を触れずして、目視のみで対象者や物体に触れているという知覚が僕にある以上、僕の脳に少なくとも「自分の身体」以外の知覚を担当している部位が物理的に存在していなければ、おかしいことになる。ところが、なぜかそこで脳科学は、「そんなことはない。確固たる視覚野と触覚野があつて、共感覚者はそれらが混線しているのだ」と説明する。僕は、脳だけが共感覚や「心」や「幻肢」を生み出しているという説自体も稚拙だと考えているが、少なくとも共感覚者の脳には視覚野や触覚野などと断定できる部位はなからうと思う。オスは元々、自らの脳や体の中に、メスの身体情報を把握できるだけの感覚能力を持って生まれ、それがたつたの数万年で西洋キリスト教社会の男性から順番に切り落とされたのが、今の多くの男性であると考えるべきであつて、「自我領域の確定」と「共感覚の喪失」とは、実は同義である。

「幻肢」というのは、一度は大人になつて西洋近現代的な自我（「自

分」Ⅱ「肌色をした全体」という実感）に安住した人が、いきなり手足を失つて陥るその西洋近現代的な自我への回帰願望と、新たな自我領域への移行との間での葛藤の現れであるというのが、僕の考えである。そして、東洋的自我においては、無理に前者へ回帰しようという欲求が少なく、あくまで自然の摂理に従おうとする。そのため、古来、日本人やポリネシア人・アフリカ人などに、そもそも「幻肢」という概念自体が存在しないのは当たり前であり、ましてや僕らミラータッチ共感覚者にとつては、「自分」Ⅱ「肌色をした全体」という一見常識的な身体感覚も、百も千もある身体感覚のあり方の一つにすぎない。もし我々人類に手が一本しか無かつたとしたら、その一本の手に対応する感覚があるのみであり、「私は、二本目の手で他の物体を触っている」などと証言する人がいれば「ミラータッチ共感覚者」ということになる。逆に、手が三本あつたら、それこそが健常者となり、手を一本失つて二本になつた人は「幻肢」と見なされるだろう。この「三本目の手」の感覚が、手どころか身体全体、あるいは「外の自然物・物体」にも波及しうるのが、僕らミラータッチ共感覚者の日常だと言えば、皆さんにも分かりやすいだろうと思う。

僕が今までに接してきた共感覚者の中で、最も極端な「西洋的自我」の揺れを実感しているのが、性犯罪被害者の女性たちであり、これは「西洋的自我と東洋的真我（2）」の後半で書いた通りである。

同じ強姦被害に遭った場合でも、女性 田さんの場合、「被害に遭った身体部位（性器・胸部）が存在しない」と主張し、どんな局所的な痛覚も快感も知覚しなくなったと言う。つまり、被害部位を脳が無視することで、自己防衛をしている。田さんは、「幻肢」患者と違って、実際に身体部位が残っているにもかかわらず、それらが「無い」かのようにふるまう。（ただし、それでも僕は、この女性の「脳」だけが自己防衛を担っているという考え方はしたくない。）

一方の 木さんは、被害後、「自分の体だけでなく、自分が触っている本や衣服や草花なども自分（自我）である」と感じられるようになった。つまり、自我を外側に流れさせ、「自分も自然の一部なのだ。傷付いたのは確固たる西洋的自我という自分ではなく、大自然全体でもあり、他人自身でもあるのだ。」という方向に本能的に持つていくことで自己防衛をしようとしていることが分かる。だから、木さんの場合、自分の好きな本が机から落ちて傷付いただけで、自分が強姦されたという恐怖感を覚える。木さんにとっては、当然ながら、動物虐待などは信じられないことであって、彼女の言うことは、これも（2）で書いたテンプル・グランディンの知覚世界（牛の心が分かる、など）と同じことだ。

田さんにとっては、被害部位はもはや自我の外にあるので、「自分の体を大切にしない」と言われるのは、親切心どころか、暴言以外の何でもない。実は、そこで 田さんは二重に傷付いた。医者や心理

カウンセラーから、まさにそう言われた。しかし、なぜそう言ってくめるのがダメで、逆効果なのか、ということが直観的に分かるのは、やはり僕が共感覚者男性だからかもしれない。仕方無い。しかし、仕方無いと言って終わらせるのも、また野暮な話である。医者や心理カウンセラーの言った「自分の体」というのは、田さんの肌色をした全体、ということであって、田さんの自覚している自我の全体に一致していない。一方、木さんに対して同じ慰め方をするとどうなるか。自分も他人も自然も連続的な存在であると知覚される 木さんなのであるから、下手をすると、加害者をも大切にしろ、と聞かせるわけで、これもまたダメである。「自我領域に変更が加えられた」ということを身を持って理解してくれる人がそばにいないければ、この女性たちの心の傷はさっぱり治らない。苦しいところだが、そこはやはり、最終的にはそのことを分かっている共感覚者男性が対応する以外になす術がない。（本当は家族が一番いいに決まっているが。）

さらに、一見すると、田さんと木さんとで正反対のことが起こっているように思えるが、僕は、この二女性に起こっていることが別物だとは全く思わない。それが別物だなどというのは、結局、「自我」この肌色の全体」という確固たる「個」や「我」を中点に据えて、この二女性の「自我のあり方」を両極と見なしているからに他ならない。今の欧米や日本が立脚している「自我」あるいはそれを生み出しているとされる「脳」のはたらきとは、それほど不安定で後天

的なものであり、偶然にも「自分＝この肌色の全体」というところにとどまっているのが、99%の健全者である、というだけである。

僕ら男にとって、「西洋的自我」や「個」という概念を一気に疑うことが出来る体験があるとすれば、それは「戦争」だと僕は思っている。しかし、戦争を起さなくとも、それらを普段から疑って生きていける社会であるべきだとも思う。

もちろん、「幻肢」に比べて、「ミラータッチ共感覚」は規模があまりにも壮大である。あるいは、「幻肢」のように、あとから生じるものではなく、生まれつきそういう感覚なのであり、人間は元々皆、ミラータッチ共感覚者である。だからこそ、ミラータッチ共感覚者には、幻肢患者が何を言っているのかが、すぐに理解できるのである。

#### 西洋的「自我」と東洋的「真我」4（どちらを抱きしめるべきか）

二〇〇九年五月二十六日 起筆、攔筆、公開

恋人が目の前で交通事故に遭ったとする。ちょうど脳と、それ以外の全ての部位の、真つ二つに、体が引きちぎられたとする。脳は割れた頭からスポツときれいに飛び出し、その直後、再び頭はパカッ

と閉じ、顔や首もきちんと胴体の側にくっついて残っている。そんな都合のよいことになるはずもないが、まあ、そうなったとする。そのとき、とつさにどうするか。時間の余裕は無く、脳と胴体のどちらか一つしか選択できないとしたら。

インディアンやアフリカの先住民なら胴体を抱きしめ、欧米人は脳を拾い上げ、日本人はどうしようか迷いながら、しぶしぶ欧米人を見て、脳を拾い上げる……。これは、二〇〇九年の今、地球上に生きる人々の身体観を端的にうまく表現していると思う。ただし、一部の日本人のみ、信念を持って胴体を抱きしめるだろう……。

原始人は、頭から出てきた何物かに驚きながら、迷わず胴体を抱きしめる。脳科学者は、これを野蛮や無知など言うだろう。

もちろん、二〇〇九年の今までに、一度でも「人間の心は脳が生み出すのだ」と述べたことのある、あるいはそう考えたことのある脳科学者なら、迷わず脳を拾い上げるべきである。今までどんなにその女の肉体を愛し、その笑顔に癒されてきたとしても、この自分その優しい心で愛してくれたのは、今、地に落ちたその脳である、という考えを、突如として曲げるべきではない。「脳を拾い上げなければ、その女の優しい性格を二度と見ることはない。脳を拾えば、あとで他の女の肉体や適当な箱にはめ込んで、再び優しい恋人に出会えるかもしれない。顔と体や形はちよつと違うけれど、心はあの

女なのだから、耐えきれぬだろう。私は脳科学者だ。「心は脳が作る」と主張してきたのだ！」・・・と、そうなるはずだ。

インディアンや原始人は、空洞になった頭にそのへんの石や草花を詰め込むかもしれない。そして、それを恋人だと信じる。一方の脳科学者は、脳を別の体や箱に詰め込む。そして、それを恋人だと信じる。

さて、僕ならばどうするかと言えば、何の迷いもなく、信念を持って女の胴体を抱きしめる。理由は、一つには、心や自我は脳ばかりがつかさどるものではないという信念から。それから、原始人同様、事故の瞬間、とっさに物理的な体積を感覚的にとらえ、「体積が大きいほうに、より多くの“恋人”が残っている」と思うから。また、脳と胴体を見て、どちらが「女」だと聞かれたら、肌色の胴体のほうが「俺の女」だと思うから。それに、後者のほうが好きだから。さらに、脳科学の発達した現代に生きる今でも、脳と、心臓や肝臓や腎臓や胃や血液や骨は等価であると思っており、胴体を無視して脳を拾い上げる正当な理由などないから。そもそも、「心は脳が生み出す」という考えを持った女を恋人になどしないから。事実、そういう女を好きになったことがないから。僕の好きになる女はいつも、「私だったら、胴体のほうを抱きしめて欲しい」という女ばかりで、あとになって「なんで私の脳ミソを拾ってくれなかったのよ!!」などと怒るような女ではないから。最近の一連のブログに書いたよ

うな考えを、僕はいつも持っているから。「私の性格を私の脳だけが生み出していると学校の先生に言われたんだけど、何か違うなあ・・・。私はぬいぐるみにだって心があるような気がするのに。」などという女性や共感覚者・自閉症者の男性・女性からの相談を、サイト・ブログ開設以来、受けてきて、本当に僕の考え方を元に作ってみたやり方や簡単な実験で、そういう人たちの拒食症や鬱が治ったから。など、理由なんていくらでもある。

僕は、そこまでの信念があるので、逆に、それまで「心は脳が生み出す」と主張していながら、恋人が事故に遭って、一瞬あたふた迷い、胴体のほうに未練を感じる脳科学者がいたら、僕はその脳科学者を絶対に信用しない。もしかしたら、軽蔑するかもしれない。少しでも迷いがあるなら、僕のように普段から、叙情的な人ですね、と周りに言われながらも、徹底して「心は脳だけじゃない」と主張すればよい。逆に、普段から「心は脳だけじゃないよな・・・」という陰鬱な悩みに生きてきた脳科学者で、事故の瞬間も迷う人がいたら、僕はその脳科学者を信じる。ただし、「迷っている」という時点で、すでに男としてはダメだと思う。迷わず、胴体のほうを抱きしめるべきである。どうせすぐに恋人は大自然に帰るわけだから、同じことなら、それまで本物の触覚で愛してきた胴体を、最後まで抱きしめて終わったほうがよい。バカだと何と言われようと、僕だったらそうする。

特にアメリカという国は、本当に何をすることも激しい国で、最近の脳科学を見ても、いったん「心・自我は脳が生み出す」と思い込んだら、ネズミで試してみた後、簡単に脳以外の臓器移植に走るようになる。だから、臓器移植の件数が日本よりも多いのは当たり前である。それで助かる人は、一時的には急増する。それが西洋医学であり、西洋人の身体観であり、西洋的自我観である。しかし、件数が多いとはどういうことか。そこで「ボロが出る」のである。例外も多い、ということだ。皮肉である。心臓移植や大量輸血をしたら性格が移ったとか、女性から肝臓を移植された男が女っぽい性格になった、などの「驚くべき」例は、当のアメリカ・欧米ほど、多く出てくることになる。そして、実際に出了。今もたくさん出ている。そういう情報は好きなので、いつも探っている。

しかし、その「驚くべき」例に、僕は全然驚かない。臓器移植で心や人格が乗り移ることは、あり得ると最初から思っている。それに、僕はそういう自分が、好きである。そして、今なぜ、日本人は、臓器移植の推進派と抵抗派とで世論が二分されているのか。理由は結局、西洋的身体観と東洋的身体観の違いである。同じ民族が異なる身体観に乗っかって議論しているのが、今の日本である。しかし、政治家だろうが庶民だろうが医療当事者だろうが、誰もそのところには触れないし、たぶん、気付いている人は圧倒的に少ないと思う。

僕は、臓器をあげるにしても、もらうにしても、「心臓や肝臓がその人の人格を生み出している」ということはあり得る」という覚悟があつて言っているのだから、その覚悟無しに臓器移植を議論している日本人は信用しない。だから、「提供者の人格の重みがかつた、“もつた”ない“物を頂く”という日本的・東洋的な心無しに、子どもに提供してくれと運動している日本人の親を見ても、何の同情も起さない。

やはり今の日本人は、いざと言うときになつても、動物として生まれ持った東洋的自我に前戻らず、胴体を横目に脳のほうを積極的に拾い上げる人がどんどん増えてきているというのは、肌で感じる。ただし、僕が思うに、どんなに時が経つても、東洋的身体観を捨てきれない日本人が一部生き残り続けるのも確実だろうという気がする。それが、日本という不思議な国なのだ。

冒頭の「物語」は、僕が勝手に考えたものだが、僕の周りにも、インディアンのような人もいれば、欧米人のような人もいる。そして、やはり僕自身は、「西洋的自我と東洋的自我（1）」でも書いたように、インディアンであり、野蛮人だと思ふ。どうぞ野蛮人と呼んで下さい、と思ふ。野蛮人にしかできない共感覚研究というのも、あるわけである。

僕は、全くの個人で、在野で、色々な共感覚者や自閉症者と交流し



てきて、右脳と左脳の機能分化も、大脳の視覚野や聴覚野や連合野などの機能分化も、正直なところ、心底から疑ってかかっている。それは、子どもの頃に初めて脳の図を見たときから今まで、ずっと変わらない。今の99%の一般健常者の脳が、それだけ物理的な機能の局在を特定できるほどに共感覚を失っているだけであり、なおかつその脳を「観測」する脳科学者の脳も、西洋的自我と身体観しか思考できなくなっているだけのことである。

だから、普段は「心は脳が生み出す」と言っていないながら、先のような事態になったとたんに「やっぱり胴体が惜しいよ・・・」と急変を示す脳科学者がいたら、僕は「なんだ、あなたも結局は、子どもで、野蛮で、僕と一緒に」と思う。

### 西洋的「自我」と東洋的「真我」 5 (脳機能局在論の疑わしき)

二〇〇九年六月一日 起筆、攔筆、公開

六月五日 ミス訂正 「脳の可塑性が 誤…低いから↓正…高いから」 失礼しました。

5/24の記事にも関連すること。ふと重要なことを思い出したのだが、幻肢は、十歳未満の子どもにはほとんど起こらないらしい。特に、

歳頃までに事故などで手足を切断した場合には、幻肢の症例はおそらく無かったと思う。

これについて、「子どもは脳の可塑性（脳の別の場所が機能を代替する性質）が高いから。生まれ持った脳の機能分化のうち、触覚（体制感覚）をつかさどる体制感覚野における身体部位のマッピングがまだ柔軟に変化するから。」と説明されるが、重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性などを見ていて、あるいは僕自身の共感覚体験からして、この説が非常に重大な間違いを犯していると思うようになった。実際は、子どもの脳には、視覚野や体性感覚野と呼ばれる物理的な「座」自体が存在しないと見るべきだと思う。つまり、子どもの脳は、「損傷を受ける」ということ自体が言えない。極端な例では、脳の半球を切り取っても、何の影響も出なかった子どもは、すでに海外でも日本でも何人もいる。要するに、脳というのは、子どもの頃には「どうにでもなる」。逆に言うと、子どもに対して、手足などに虐待した場合でも、脳を破壊されたり強姦されたりしたのと同じくらいの、重大な心の傷になる。

共感覚者・自閉症者の場合、そういう視覚野（後頭葉）や聴覚野（側頭葉）や体性感覚野（頭頂葉）などの区別がない状態が、大人になってもずっと続く。つまり、共感覚者や自閉症者は、今の壮年期に求められる社会生活では極めて生きにくい苦痛を感じながら、幼児期と老衰期には、脳に多少のことがあっても健常者よりも耐えられ

る可能性があることになる。それは、「社会的存在であるホモ・サピエンスとしての強さ」ではないが、「動物としての強さ」ではなからうかと思う。

共感覚者の脳を調べると、例えばミラータッチ共感覚だと、本当に視覚野と体性感覚野が同時に光るなど、一般の人では起こり得ない活動が観測されるが、それに対する今の脳科学の解釈（視覚野と体性感覚野が何らかの形で連絡しているとの解釈）はおそらく間違っていて、どちらも「共感覚野」、つまりどちらも「視覚野」であり「体性感覚野」であると見なければおかしいことが出てくる。どちらも「共感覚野」なのだから、どちらかに傷が入っても、共感覚が失われない可能性がある。

脳卒中の人などで半側空間無視（半側空間失認・半側無視）という症状が起こることがあって、この人たちは、例えば大脳の右半球に損傷を受けている場合、左側にあるものを無視する。

<http://www.osaka-med.ac.jp/deps/reh/st/shitsunin/shitsunin.htm>

（半側空間無視の図の例）

また、不思議なことに、建物の前に向かって立ったときには建物の右側だけを描くのに、建物を背にして立ったら、向かって立ったときの左側（背中の方）を描くことがある。つまり、目で見ていようがいまいが、常に自分の体位の左側を無視するので、グル

ッと回って左側にぶつかるとか、などを確認しながら歩くといった練習をする。

さらに、半側空間無視が起こるのは、ほとんどが、脳の右半球が損傷して左半分が認識できない場合で、左半球が損傷しても、右半身麻痺の他には何も起らないケースがほとんどだ。つまり、成人の脳は、右と左でも全然機能が違う。現在の右脳ブームなどは、成人の健常者の脳だけを見ているものにはすぎない。半側空間無視というのは、大脳上に物理的に別個のものと特定できるほどの身体機能分化を達成した大人や非共感覚者ほど起こりやすく、そうではない子どもや共感覚者では起こりにくいということが言えるかもしれない。

そして、ここで、僕が最近展開してきた「自我」の問題を考え合わせる、半側空間無視を「治す」という発想自体、「現代の社会生活には西洋的自我が必要とされるから」という理由のみによるのではないか。つまり、例えば、対女性共感覚で言えば、僕のように女性の姿を見ただけで排卵や月経が分かるという共感覚は、大多数の男性は持たないわけだが、それについて、「排卵無視」などという病名は付けられない。どうしてかと言うと、現代社会で必要がないから、セックスすれば子どもなんていつでもできるから、というだけである。しかし、僕からすれば、一般健常者男性の知覚世界は、半側空間無視と同じように映っているわけだ。

もつと言うと、子どもの脳では、前頭葉などという「人間が高等動物たるゆえんの座」も、物理的な位置が「観測」できないというのが正しいのではないか。細胞が分裂するときに、染色体が中央に寄ってくるが、あのようなごく瞬間に現れる「明確さ」が延々と普遍的に続いているように見えているのが、一般健常者の脳であるというだけの話ではなからうか。赤ちゃんでは、脳の全体が「共感覚野」の状態にあるということで、例えば、赤ちゃんの頭をなでた場合、赤ちゃん本人からすれば、手足やおなかをなでられたときとの区別が付いていないということだ。これを実体験として証言したのは、僕以外では、僕が交流してきた自閉症の男性と、共感覚者の女性、性犯罪被害を受けて共感覚が蘇った女性の方々だった。そして、さらに子どもの脳では、触覚や視覚や聴覚の区別も付いていないだろう。赤ちゃんのスキンシップがなぜ重要かということの意義は、おそらくそこにある。

これで、どうして幼少期や十代・二十代の若い頃に性的被害を受けた場合に、簡単に共感覚が蘇る女性がいるのかも、説明できる。性的被害を受けても共感覚が蘇らない女性がほとんどを占める中、前例に挙げた田さんやAさんに共通していることは、被害を受ける前に「子どもの頃は共感覚があった」と証言していることだ。つまり、彼女たちにとっては、性器や胸部と、それ以外の身体部位が、別物ではないという自覚が、思春期になっても、成人しても、ずっと

とある。それがさらに、身体より外の世界にも向かうときがある。そうになると、ぬいぐるみが机から落ちたり、好きな本が破れたりすると、自分が強姦されたと感じてしまう、と彼女たちが述べるのも、無理はないと思う。

脳機能局在論やペンフィールドのホムンクルス（体性感覚野の地図や人形）などというのは、ここ最近数百年の、西洋で生み出された「健常者」なる概念に該当する西洋人や現代日本人の脳だけに適用可能な、人類史の一抹の「よどみ」にすぎないのではないか。

#### 西洋的「自我」と東洋的「真我」6（共感覚と宇宙と東洋思想の話）

二〇〇九年六月十六日 起筆、攔筆、公開

僕はいつも、いわば反理系学問的な思想を持ってブログを書いていながら、実は幼少期から宇宙・天体・物理学・数学・生物学など、何でも興味があつて、小学生の頃から一人だけ学習発表会で赤色超巨星について発表したり、天体や相対性理論や量子力学の本を読んだりしていた。一時期は、ポアンカレ予想を解いたペレルマンに人間的にも心酔していたくらいだ。アイザック・アシモフのSF世界や宇宙関連の写真集も、熱が出たときにはずっと見ていた。最も好きなのは数学者の岡潔の宇宙観だが、今でも宇宙に対する関心は甚だ

大きいものがあって、暇があるたびに宇宙や時空や重力について考えている。

時空が歪むとか、時速300kmの新幹線どうしがすれ違ふときにお互いに時速600kmと感ぜられるというのは本当はウソであるとか、物体が非実在的に実在することがあるとか、宇宙は有限か無限かを思惟する自我が空（くう）であるとか、亜光速で進んでゆく新幹線を遠くから見たら半永久的に停止して見えるとか、そういうことは昔から、数式ではなくイメージとして頭に自由に思い描けた。むしろ、数学や物理学として数式を学ぶというのが苦手で、逆に仏典や東洋思想書や奈良・平安時代の和歌集を読んでいたら急に数式が浮かんでくるという感覚だった。

時々、僕がたまたま東大に行っていたからか、「共感覚を身に付けたら、頭が良くなって、想像力が増して、東大に受かるんですか？」などと奇妙な質問が来るけれども、そもそも東大入試や学歴に必要な能力と、共感覚や宇宙や東洋思想や仏教を理解する能力とは、全く異なるものだ。たとえ僕の東大入試の答案や、大学で書いた論文を見たって、最高の東大生の模範回答が出てくるというだけの話で、そこには少しも僕が共感覚者・特殊な能力の保持者である片鱗も見せていないわけです。当たり前です。東大入試の数学の問題の日本語文を読んだだけで、数式に書かなくても答えが降ってくる（瞬時に思い浮かぶ）ことはあるけれども、しかし、それはただそれだけ

のことで、要求されている数学的に「正統な」回答とは何の関係もない。我々が与えられた数学・物理学の出題に答えるということには、結局はサイン・コサイン・タンジェントがどうだ、数列がどうだ、確率がどうだ、ということをやわざわざ西洋社会や現行の物理学・物理学で発展した数式に書いていくことであって、もっと速い回答の仕方、宇宙や哲学や仏教を理解する力、日本古来の古き良きアニミズム、世界中の少数民族の千も万もある宇宙観を切り落とし、ていくことだ。それらは、本当は西洋的・四則演算的宇宙観より以前の、もっと根源にある大切なものだ。むしろ、僕が東大レベルの数学の問題の日本語文を見て瞬時に回答が「ルート311」などと降ってくるよきの東洋的・仏教的直観、宇宙達観的な感覚は、その辺りの近所の子どもが道端に咲いている花を見て「きれいだな」と思う感覚と、同じものなのだ。そこに何らかの「知的発展過程」があると思ひ込む勘違いをするか、直観的に「子どもの感性」との一体性を理解するか、それは大きな違いだと僕は思う。

量子力学の貢献者ニールス・ボーアも、量子力学が向かおうとしているところが、仏教や老荘思想と同じであることに気付いて、途中から仏教・東洋思想に傾倒した。数式、あるいは足し算・掛け算と言った四則演算は、僕の中にあつた百も千もある宇宙の解き方のうちのひとつ、つまり、偶然にも西洋キリスト教社会で発展した自然科学的な数学・物理学が世界に広まったものにすぎず、それが普遍的と思われているだけのことなのだ。むしろ、成人してからのほうが、

頭で時空間的にイメージしにくくなった数学・物理学分野もある。しかもそれは、共感覚が少しずつ薄れて行っているのと確実に関係があるという自覚がある。昔は、八次元くらいまではスムーズに頭で思い描けた。

最近も、Youtube で宇宙のことを調べていたら、一般の人に共感覚を説明するのに都合のよい映像を見つけた。（二〇〇八年の「芸能界宇宙部」（テレビ朝日）

<http://www.youtube.com/watch?v=XnF2dMJAOo>

ここで、惑星科学者の松井孝典氏とロンドンブーツ1号2号の田村淳は、極めて正しいことを言っていると思う。この二人を少し見直した。「知覚・認識していないものは実在しない」というのは「真」である。この映像で使われた図の線の内側を、我々ヒトの知覚、さらに僕の共感覚世界と思えば、きれいに説明できる。むしろ、こんなことは原始日本人や仏典がすでに言っていることだ。つまり、「実在は認識に先立たない」。普通の五感で認識できる宇宙の果てや物理学と、僕の共感覚が思惟している宇宙の果てや物理学というのは、全く違うものだ。

今、Aさんを背にして立っているとして、Aさんが実在すると言えらるかを物理学的に証明しようとする、「実在するかどうかは分から

ない」という結果が出る。「実在する」ことが言えるためには、Bさんを構成している一つ一つの素粒子なり波動といったものが、「私」の観測の有無に関係なく実在していることが言えなければならぬ。物理学は、それを言えない。もつと言うと、「答えがあるはずなのに分からない」のではなく、「この命題を思惟している自分（自我）が実在するとは言えない」という結果になる。ここで、「この命題」を思惟している自我意識のみをいったん認めるのが唯識思想であり、これを再び「空」として退け、「色即是空」を断言するのが『中論』（中観思想）である。いわば「自我する自我の非在性」が大乗仏教の根本思想なのだ。この中観と唯識の「語り合い」こそが、僕の自作言語スラフォーリアの根本思想になっている。「どう考えてもAさんが実在すると感じられる、この日常」は、実は我々の日常生活が「三次元・ニュートン力学・西洋的自我・キリスト教一神教的価値観」などに制約されて事足れり、という状況にあるからこそ認識され得るのであって、最近のノーベル賞の益川氏などがやっている世界観などというのは、中観思想や唯識思想などの原始仏教がすでに書いていたことにどんどん近付いてきている。つまり、物理学はキリスト教圏で圧倒的に発展したのに、物理学を突き詰めたらキリスト教的世界観が否定されて仏教と同じになるであろう未来が見えてきた。それはよいことだと僕は思う。共感覚を持つ僕からすれば、最近の素粒子物理学と仏典が言っていることは同じになってきている。最後は同じところに行き着くのだから、そんなに大規模な実験施設を造ることはない、僕は少し疑問を感じる。ミシェル・フーコー

は、「人間」や「自我」という概念は、西洋でさえここ数百年の空想の産物にすぎず、再び消滅するべきだとまで書いてある。西洋社会の言う「無」とは、「有」に対する「無」であって、「有」か「無」か、宇宙は有限か無限かを思惟する自我の「無性」を説いているのが、仏教的・東洋的「無」である。宇宙に果てが有ると考えても、無いと考えても、どちらも想像しにくいと感じるのは、いわば西洋的価値観のほうが脳を支配しているからだ。

僕の共感覚と同じルールに乗っているのは、子どもや自閉症者男性の感性のほうであって、僕が東大に受かったときに使った能力だけは、また別の次元にあるわけだ。あえて上下関係を付けるなら、むしろ数学や物理学の問題で使った数式的能力というのは、音に色が見えるとか、全ての漢字に色が見えるとか、女性の排卵を感知できるとかという僕の共感覚から見れば、「たいしたことではない」と思うわけだ。「たいしたことではない」ことに「たいした」労力を使わなければならなかったというのが、僕が共感覚を持って生きる上での苦労だったと言える。

例えば、こういう立体と立体があつて、それが重なった部分の体積はいくらか、などというときに、

「人と見しことだに残る月の夜の袂さびしきときの木枯らし」

（ひととみし ことだにのこる つきのよの たもときさびしきとき  
きのこがらし）

などという和歌を思い付いて、それによって答えが $12\sqrt{5}$ 立方cmだ、などと分かることもあるわけだ。こういう極端な例が、高校時にひと月に数回あった。どうしてそうなんだ、と聞かれても、「どうして $1+1$ は $2$ なんだ」と僕が人に向かって聞くようなもので、トートロジー（同語反復）に陥ってしまう。

だから、よく自閉症が「他者の心が分からない病気」などと言われるけれども、あれは本当に「他者（西洋的自我に対峙する他我）が実在しない」というだけの話で、原始社会では何の障害にもならない。また、女性の排卵を感知するという僕の共感覚一つを取っても、僕と他の男性が言っている「女」という概念が違うわけだ。だから、「女なる確固たる生命体が実在していて、排卵が分かる動物やヒトの男性と、そうでない多くの男性がいる」とか「そういったまだ解明できていない共感覚者男性の認識世界を脳科学が説明する」というとらえ方は誤りであり、むしろ「女というのは、男の知覚が実在させている」というのが正しい。僕にしても、ライオンやコウモリではないから、他の男性と知覚のほとんどは共有しており、結果として周辺の男性とほぼ同じ「女」の概念について「言及」できる、というだけの話である。だから、「恋愛」にしても、実は女性を好きになるということは、自分自身の知覚世界を好きになつていくということと同義である。「恋愛」でさえ、我々は自分自身の知覚世界に制約を受ける。最近の脳科学は、ようやくそれを恐れずに言い始め

た。仏教はそれを何千年も前から言っている。僕も、共感覚研究によつて、最後はそれを言おうとしている。

実はあつた「共感覚」至上主義らしきもの（ドイツなど）

二〇一〇年一月十一日 起筆、攔筆、公開

哲学者の中で、自分の哲学に明確に「共感覚」の語を用いている（共感覚の衰亡を嘆いた）人では、メルロー・ポンティが有名だけれど、あのマルクスを読んでいても、時々、近代人類における共感覚の衰亡に対する極端な悲愴感・諦めとも言うべき感情がああ唯物史観につながったのかもしれないと思わせる箇所も多い。ちなみに私は、イデオロギーとしてのマルクスには心酔できないけれど、マルクスという人は、まあ嫌いではない。

「五感の形成は、現在に至るまでの全世界史の一つの労作である」というマルクスの言葉は、元々は「常識（コモン・センス）」と同じ意味・語源であつた「共通感覚・共感覚」の分裂（＝五感の完全な分化）の果てに資本主義の矛盾があるという皮肉に満ちていて面白い。しかし、「下部構造の変化の深層構造は共感覚の衰退（知覚の変化）である」などと明言することはついになかった。これがあれば、もっと興味深かつたのに、と密かに思つてしまう。

マルクスが「五感は何も神から降つて来て与えられたものではなく、我々が労力をもつてして作り出した近代西洋のものでしかない」と考えていたという事実だけでも、私は興味深く思う。なぜなら、本当は「資本主義の矛盾を正すこと」と「我々が共感覚を肉体内部において奪回すること」とが穏やかに結び付くという、私の考えに近いものが出てくるからで、しかし、マルクスはどうしても外部への発散、すなわち「暴力革命」に発想が行くのだった。暴力革命ではなく、「共感覚を取り戻せ」という徹底した言論による方法もあり得たのではないかと思う。

今の日本の共感覚研究者はもはや参照していないかもしれないけれど、例えば、マウラー (Maurer) の著書『The World of the Newborn』でも、すでに「生後数カ月までの人間は、全員共感覚者である」、「各感覚器官に対応する分化は、幼児の脳には存在しない」と明記されているし、レウコヴィッツ (Lewkowicz) やタルケヴィッツ (Turkewitz) の論文も、「乳児には視覚も聴覚も区別がない」、「乳児は、共感覚という或る一つの知覚の“強弱”だけを区別している」としている。ウェルナー (Werner) やマークス (Marks) も、共感覚が人類全員に普遍であつた時代があると見ており、今の欧米や日本の心理学者・神経科学者がかるうじて参照していると思われるマークスの論文でも、共感覚は大人になるにつれて「失う」ものであつて、共感覚者はそれをそのまま維持しているにすぎない、と書か

れている。

それにしても、「共感覚」至上主義的な発想は、やはりドイツ実存主義あたりからかなり目立って出てくる。西洋哲学では、プラトンのイデア・デカルト的自我をひっくり返して、一度手の平を返したように「共感覚」至上主義に回ると、五感の分化した大多数者に対する攻撃が激しいのだが、ドイツは特にそうである。

もつとも、デカルト以降の西洋哲学が「共感覚の否定」、「共感覚者の排除」であったということについて、西洋哲学内部からも自発的に反省されていることは言うまでもない。

ハイデガーの愛人のハンナ・アーレントが言う「共通感覚を奪われた人間とは、論理的に思考できる動物以上の何でもない」という言い回しも、「共同体感覚」としての「共感覚」のことを言っており、それが無い米英仏人に対するやたらと挑発的な自信になっている。ニーチェもハイデガーもそうだが、実は一転して「共感覚・古代的知覚世界を有する者の復活・勝利」への渴望が、正統アーリア人種・最上の「動物存在」としてのドイツ人の優越性なる幻想と強固に結び付いていて、それがナチスと極めて密接な結び付きを持つてしまうことになる。

こういうことは、我々日本の共感覚者は反面教師としてうまく見て

いくべきだと思う。特に、対女性共感覚を持つ私としては、日本人でよかったと思うことが多い。なぜなら、あの頃の西洋哲学に私の対女性共感覚を語らせたとなると、「対女性共感覚を失った昨今の男性は皆、ただ退化しただけの存在である」といったニーチェ哲学ばかり、ハンナ・アーレントばりの挑発的な言い回しで語られるに違いないから。むしろ、そういう語り方を阻止するうまい日本的・東洋的な方法はないかというのが、私の最近の思索でもある。

「対女性共感覚」と、ニーチェの言う「デュオニユソスのもの」とを同一視して語ることも、やってみれば一つの哲学になるだろうなどは思うけれども、それは勇気のいることであるし、私個人の日本人としてのアイデンティティにも合わない気がする。

私が自分の共感覚、特に対女性共感覚を持つことから来る、今の日本社会との何とも言えない不和の感覚を乗り越えようとしてニーチェやハイデガーの哲学を一通り通ってきたことは否定できないけれども、やはり日本人男性は日本人男性として、どんなに苦勞・回り道してでも、和歌や日本語や能や茶といった「穏やかな」文化的観点からこそ「かつての日本人の常識・普遍としての共感覚」に達するべきだと思う。

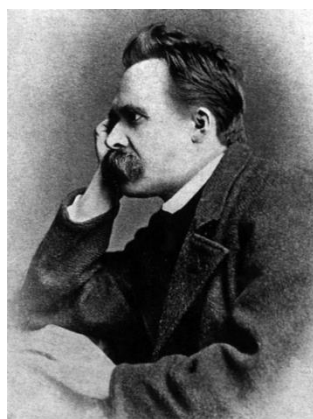
## 第一部



編纂中。収録を待たれよ。

## 第二部 「生（せい）の哲学」

二〇一〇年十二月二十一日 起筆、擱筆、公開



《フリードリヒ・ニーチェ》Photographer Gustav Schultze, Naumburg, taken early September 1882. Nietzsche by Walter Kaufmann, Princeton Paperbacks, Fourth Edition.

先日掲載した精神病理学研究のページに出てくる「生の哲学」は、「なまのてつがく」ではなく、「せいのでつがく」という哲学用語です。つい使ってしまった、申し訳ないです。

このページをお読み下さった共感覚者の方々から、「岩崎さんの共感覚の語り方って、まさにナマの人生哲学ですね！」というご意見

があったので、一応書いてみました。でも、不思議と的を射たご意見だと思えますし、何となくおっしゃりたいことは分かりますね。何だかほほえましいことですし、褒められると嬉しいのですが……。しかし、学問としての哲学における「生の哲学」は、また違った意味を持っているのです。

私としては、「日本人の鬱や共感覚をこの生の哲学の観点から語る人がもつともいいと思うし、自分もその観点から語っていきたい」という内容を書いているわけです。難解ですみません。

「生の哲学」は、西洋では、最初は哲学ではなく、文学的エッセイとして現れました。次第に、反主知主義・反実証主義・反キリスト教・反機械論・反哲学といったイデオロギーとして確立し、やがて「生の哲学」自体が一つの哲学になった感がありますが、日本・東洋では、「生の哲学」的な思想というのは、ある意味で人間の実存の自然なあり方として、生活に密着した歴史を持つてきたと言えるでしょう。

事実、「科学もまた一つの宗教である」（科学が悪いと言っているのではない）、「仏教は宗教ではない」といった、僕が持っている考え方自体が、西洋の「生の哲学」者たちの主張するところと同じ洞察・立場に立っています。

ソクラテス以来ヘーゲルに至るまでの従来の西洋哲学では、「生の哲学」的な考え方のほうが異端であったわけです。「生の哲学」とは、本来は「反哲学」です。僕は、この考え方によって日本の鬱や共感覚を語るべきだという思いを持っている、ということを書いている

わけですね。

■「生の哲学」

● ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%9F%E3%81%A6%E5%93%B2%E5%AD%A6>

● 大辞泉

十九世紀後半から二十世紀初めにかけて、理性主義・主知主義・実証主義の哲学や唯物論などに反対し、生きている生、体験としての生の直接的把握を目ざしてヨーロッパで展開された一連の哲学的傾向。ショーペンハウアー・ニーチェを源流とし、デイルタイ・ジンメル・ベルクソンらによって代表される。

● 大辞林

実証主義や機械論などに対抗して、十九世紀中葉から起こった哲学的潮流の一。真実在を、知性では捉えられない非合理で根源的な生であるとし、生の直接的把握（解釈・直観）を意図する。ニーチェ・ショーペンハウアーに始まり、ベルクソン・デイルタイ・ジンメルなどがその代表。

第三部 ビン・ラディンにとっての神「アッラー」

二〇一一年五月五日 起筆、擱筆、公開

ウサマ・ビン・ラディンがついに殺害されたらしい。「ビン・ラディン的な思想は、表に出さないだけで、実は自分の中にもあると感じている日本の男性は、けっこういるのではないか？」などと、突如僕の言いたい結論を書いたら、不審に思われるかもしれないが、明日東京がテロ攻撃に遭い、僕とて死ぬ運命にあるかもしれないわけだし、感じたことは書けるうちに書いておきたいと思う。

実際に僕は、一部の日本人の内面にある鬱屈した感情が暴発しない理由は、単に「日本にはアッラー（アッラーフ）のような全知全能の唯一神を認める土壌がないから」だけであると思っている。

一言で言うと、僕にとつての関心事は、「ビン・ラディンにとってアッラーとは何であったか」、「人間の男一匹がそんなに夢中になれるものがあるのか」ということ。いや、そういう問いの答えは、自分の日常生活の中で用意してあるのかもしれないが、一応は改めてそういう問いを投げかけてみたい。そのような人生のテーマを僕にももたらしたテロリストが、ついにアメリカに殺された。

アメリカはビン・ラディンを暗号名でジェロニモと呼んだ。ジェロニモとは、アメリカ白人による一連のインディアン殺戮作戦（ナバホ族全滅作戦など）に抵抗したアパッチ戦争（対白人抵抗戦）で、最後まで抵抗したインディアン戦士の名前である。歴史に興味の

ある、インディアン好きな日本の男の子なら知っている、おなじみの戦士である。

ともかく、それはそれとして、ナバホ族やアパッチ族などの研究で確認されているところでは、アメリカは、インディアン（ネイティブ・アメリカン）を殺戮するときに、まずターゲットのインディアン部族A・Bのうち、Aを狭い土地に追い込んでおき、それが別のインディアン部族Bの勢力拡大のせいであるという話を作り、行き場のなくなったAの闘争心を鼓舞させてBに武器を与え、AにBを襲わせてBの力を吸っておき、今度はBを襲ったAを「略奪を繰り返す危険部族」と見なして全滅させ、さらに力を失っているBをも同時に全滅させるという方法を取っている。

インディアンを捕らえたあとに行われた処置は、アメリカ支配層の歪んだキリスト教観を如実に物語っていると思う。例えば、その部族の三分の一は殺し、三分の一は拷問・強姦などをし、残る三分の一はキリスト教に強制改宗させるという方法が見られる。

不可思議だが、インディアン殲滅作戦を（アメリカがやったことではなく）キリスト教がやったことだと暗に主張することを（避けるどころか）むしろ心がけているのが、アメリカの大陸征服の特徴であった。

「三位一体」ならぬ「三法一体」のこの方法を、厳密にはオバマ大統領や米軍も免れることはなかったと思う。イラク戦争で起こった事態は、過去と全く同じであった。肌の色の違うオバマ大統領が、すでに内面は白人に成りきって、あえて「ジェロニモ」と「イスラ

ム教」という用語を同時に使って戦争を遂行し、勝利を宣言したことは、重大なことであると思う。この両用語がどのようにして有機的に結び付くかを考えてみたい。

冷戦、九・一一、イラク戦争という一連の動向において、アメリカ（及びそれに追従した日本）は、先のAをテロリスト（ビン・ラディンないしアルカイダ）、Bをソ連と位置付けたと言えるだろう。アルカイダは、元を辿れば、ソ連のアフガン侵攻に対抗するためアメリカが作った組織で、ムジャーヒディーン（イスラム義勇兵）から成る傀儡テロ組織の拡大版であるけれども、大半の日本人の意識においては、Aにイスラム教という宗教への負のイメージが組み込まれてしまっている。だから、確かに日本人は、イスラム教自体を「放っておけば自らアルカイダのような武装組織を作り出す宗教」だと思いがちではあると思う。

しかし、アメリカがあるいはオバマ大統領やブッシュ大統領が、ビン・ラディンをかつてのインディアン戦士ジェロニモと同一視してそう名付けたという事実は、奇しくも、アルカイダの原型の結成と重武装化がアメリカの尽力によってなされたという現実を、僕のような遠い日本の一若者にさえ簡単に思い出させてしまう。ただし、アメリカは、「日本人は、そんなことまで思い出す国民ではないだろう」と考えたと思う。

日本のマスメディアはビン・ラディンを「容疑者」と呼称・記載しているけれども、アメリカが若きムジャーヒディーンに武器を供与し、ビン・ラディンとアルカイダを利用していたことを、僕ら日

本の若者は忘れるべきではないと思う。

自分にどのくらいの教養があるか、世界情勢を見る目がどのくらいあるか、こういうことは自分では分からないものだけでも、アメリカが正義で、ビン・ラディンが悪であったという分析は、少なくとも僕には本能的にも理性的にも受け入れがたい。

大川周明や井筒俊彦のような、僕が魅力を感じるイスラム研究の大家は、今後の日本に現れるだろうか。彼らイスラム専門家だけではないが、少なくとも彼らは「日本は東洋に属する」とのアイデンティティを主張する文脈で「東洋」と「西洋」という用語を普通に使い、いわゆるイスラム教徒の中に東洋精神を見ていたと思う。

大東亜共栄圏構想は、目が覚めてみれば一部の軍部の誇大妄想であつたにせよ、その最大版図は、日本民族（大和民族）・漢族・朝鮮族・満州族・蒙古族の他に回族（イスラム教徒）を含み、イスラム国家インドネシアを通り、さらにはサウジアラビアやエジプトに達し、ひとえに西洋列強のキリスト教圏を除いていた。

このことは、同じ人間としての心の問題の上では、「イスラム教義は東洋精神・東洋の実存に親和する」という認識が日本の教養人にはあつたことを示している。大東亜共栄圏は、五族協和・王道楽土の満州国に組み込みきれないイスラム東洋精神を組み込むための理想主義的措置、という側面があつたわけである。

特に井筒俊彦は、日本からイスラム世界を経由してギリシャをも含む東洋精神の構築を夢見ていた。大川周明も、「中国・朝鮮・東南アジアを征服すること」ではなく、「イスラム教を仲間に引き入れる

こと」を念頭に置いていた。僕自身の中にも、なぜか「東洋」なる言葉の中にイスラムまでを含める意識は、井筒俊彦の『意識と本質』を読む前からあつた。

むろん、このような直観においては、「西洋」とはほとんど「キリスト教世界」を意味するのだが、三島由紀夫が「カトリックは世界で最もエロティックな宗教であり、あの荘厳な雰囲気は大切なものだ」と述べたように、大川周明や井筒俊彦にとつても、実際の「敵」は、キリスト教自体と言うよりは、「西洋列強の帝国植民地主義」であり、「東洋人蔑視」であつた。

ならば、どうして「西洋」という語に「キリスト教」の響きがあるかと言うに、「西洋人」自らが「西洋」や「欧米」や「ヨーロッパ」という語の中に「キリスト教」の響きを入れて言葉を発するからであらう。

このたびのイラク戦争でも、オバマ大統領が同じ方法を用いたのは印象的だった。オバマ大統領は、イラク戦争中も、「これは決してイスラム教に対する戦争ではない」と念を押して述べ続けたが、ビン・ラディン殺害作戦成功の宣言の際にも同じコメントを発したのが放映された。

そんなコメントをあえて世界に向けて言わなければ良いところを、こうして暗黙のうちにアメリカ市民宗教型キリスト教の勝利を宣言するとともに（アメリカの共時態的勝利）、さらにビン・ラディンを「ジェロニモ」と結び付けることで、過去のアメリカの大陸制覇の正当性の宣言（アメリカの通時態的勝利）をも同時におこなうとい

う、かなり凝りに凝った宣言の仕方をしている。

僕は別に英語が得意なわけではないが、オバマ大統領の英語に特徴的なのは、「神 (God)」とは言っても「キリスト」とは言わないということである。これは、対内的にはユダヤ教徒に、対外的にはイスラム教徒に配慮したものだと思われるし、「市民宗教社会アメリカ」を安定的に作り上げていくためのレトリックだと思う。

ここで、僕の個人的なエピソードを書いてみたい。僕は官僚でも公務員でも何でもない、五足ぐらいのわらじを履いて生きる自由人だが、昨年から仕事の関係で、内閣府をはじめ官公庁の文書に触れる機会がある。

その中で、ユダヤ・キリスト・イスラム各一神教、すなわちいわゆるアブラハムの宗教の「神」と、天皇の現人神（アラヒトガミ）性としての「神」の違いを、ひしひしと感ずることが増えた。これは、官公庁の正式文書が元号で書かれていること、そして現在は一世一元制が採用されていること、という、いわば「天皇と神概念」についての思考を戦後に停止した日本人の「ダブルスタンダード」が原因となって生じている問題であると思う。

これまでに目にした中で、日本政府及び官公庁の日本観について、最も強い不満と滑稽さを覚えたのは、「平成二〇〇〇年」などという記述であった。これは、ある官公庁において実際に交わされた書面の一部に記載されたものであるけれども、常識的に考えて、平成二〇〇〇年に今の天皇陛下が何歳になっておられるかを考えてみれば良い。

官公庁の文書や法令には、天皇陛下に、まるでアブラハムの宗教の言う唯一絶対永遠の命を強要する書式が見られる。

ところが、日本の天皇の伝統において、「永遠（えいえん・とわ）」「千歳（ちとせ）」でありうるのは、「万世一系」のことであって、天皇陛下個人の命、細胞や内臓などの生命活動ではない。天皇陛下御自身が後者の永遠を主張したこともない。

その天皇陛下個人の生命の限界のほうに元号を合わせることにしたのに、様々な文書を元号で書こうとしている。だから、平成300年とか平成二〇〇〇年という書き方が登場するのだが、これは、実際に政府機関から民間法人に対して「そのように書きなさい」と指示が下された実例である。

このような日本観においては、天皇が「人間宣言」をしようがしまいが、天皇の「現人神」性をむしろ両極から否定しうる。簡単に言うと、日本の官公庁は、天皇という存在を、ヤマトコトバが指す「カミ」とも、アブラハムの宗教的な「神」とも扱っておらず、新種の神概念を作り出して問題を乗り切っており、なおかつ天皇を、まるで「聖書を身勝手に解釈して自分を神と同一視した歴史上のローマ教皇」のような存在として解釈していると言える。

立場は色々あるとは思いますが、もし「天皇は現人神である」と信じらるならば、つまり「天皇は人間の姿をした神である」と信じるならば、天皇の肉体は、アツラーと違って人間そのものなのだから、我々と同じく生老病死の運命にあるはずである。

もし天皇陛下に現人神性を認めて、尊崇の念を払うならば、次の

二つの方法があると僕は思う。一つは、「平成二十三年十〇〇年」と書くこと。もう一つは、日本国の公文書をキリスト教圏の暦（グレゴリオ暦）である西暦で書き、これによって、天皇の持つ性質を三島由紀夫の言った「統治的天皇（政治的天皇）」と「祭祀的天皇（文化的天皇）」とに二元的に分けて、前者に西暦、後者に和暦を付帯させ、日本の公文書を天皇の持つ統治的権威（government）とのみ親和させることで、天皇の穀物神としての祭祀的権威を独立させて守ること。

これで、アメリカの主権国家観やキリスト教とは全く異なった天皇の位置付けが上手に保存されるのではないだろうか。

これが絶妙な形で実現されていたのが「日本化された律令制」の時代で、「行政・立法・司法など全ての統治的権威」は太政官が担うけれども、天皇の祭祀的権威をバックボーンとして動く神祇官に対して、太政官は口出しができないように独立させられていた。

しかし、現在では、官公庁の正式文書が一世一元制に縛られた元号を採用しているから、逆に天皇は遺伝子操作でもどんな大手術をしてもなるべく長く生存し続けなければならないかのような記載になっていく。そんな理不尽な現状は、天皇への不敬・冒瀆にはならないだろうか。

以上のことを、少し機会があったので官僚相手に指摘してみたら、サツと交わされて「若者なんだから、そんな難しいことを言わずに、国の言うことと法令に従うように」と言われた。しかし、僕にはこういうことが関心の対象なのである。こういう議論を停止して戦後

を過ごしてきた日本のあり方を、個人でできる範囲では正してみたいと思ってしまう。

時系列的には、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の順に誕生したのに、なぜユダヤ教は安定的な国家を持つことができず、イスラム教はもはやその宗教自体がテロリズムの温床と思われ、帝国植民地主義という概念はキリスト教とのみ親和・結託したのか。これは、僕個人にしてみれば、人格神というものをどうとらえるかにかかっていると感じられる。

僕は、シーア派やイスラム神秘主義については、自分の日本人観や日本観と親和するものとして分析したことがあるが、ともかくスンニ派だろうとも、イスラム教で最重要であるのは、「ありとあらゆる目に見えるもの（被造物）を神としない」ということである。

ところが、これは「あらゆるものをアッラーとしない」ということであって、ヤマトコトバとしての「カミ」としない、という意味ではない。だから、極端に言えば、「アッラー」を「神」と翻訳している日本のイスラム書物は、ビン・ラディンどころか穏やかなムスリムにとっても悪書でありうる。

従来日本の八百万の神をそのまま「神」、外来のアブラハムの宗教の「God」を「天主・天帝」と翻訳したかつての日本人は賢い。アッラーはアッラーであって、「神」ではない。それを大川周明も井筒俊彦も分かっていた。アッラーは人格神とされるけれども、「アッラーは人格神か否か」という問いを立てたのはキリスト教で、アッラーの姿は今までもこれからも偶像化されない。

逆に言えば、イスラム教は、「汎神論」ならぬ「汎アッラー論」でありうるかもしれない。ムハンマドは、預言者・使徒・開祖・軍事指導者などと呼ばれるけれども、「アッラー＝ムハンマド」ではないから、キリスト教のような「三位一体説」、「神とキリストの父子関係」といった概念もありえない。

むしろ、日本国民のほうが日常生活で宗教を考えなかったり、世界情勢に無知であつたりするだけであつて、大川周明や井筒俊彦は、イスラム原理主義勢力や神秘主義勢力のアッラー観が日本人の汎神論者性と親和する可能性があることを見抜いている。

少なくとも、ビン・ラディンが「アッラー」と言ったとき、それは日本の官公庁にとつての「平成二〇〇〇年」的な間抜けな「神」ではなかっただろう。ビン・ラディンは、そんな間抜けな矛盾を許すような人間でなかったということだけは、確かだろう。ビン・ラディンが背負っていた「アッラー」とは、そんなナマ易しいものではなかっただろう。

少なくとも、オバマ大統領が、自分がブッシュ大統領から継承した戦争行為の結末の正当性を担保したものを、市民宗教としてのキリスト教だと暗に主張した一方で、前教皇ヨハネ・パウロ二世がキリストの名を背負ってイラク戦争にノーと言つた以上、二つの別の宗教が同じキリストの名を冠していると思へない。

このうち、三島由紀夫の言う「世界で最もエロティックで荘嚴な宗教たるカトリック」を一宗派に持つキリスト教が後者であるとするれば、ビン・ラディンが攻撃したのは前者のキリスト教であろう。

ビン・ラディンにとつては、おそらく日本の天皇が現人神であろうともなかるうとも、頓着しなかつたと思う。

日本の天皇の現人神性・祭祀的権威は、アッラーとはぶつからないものであり、ぶつかるかどうかという問い自体が存在しないかもしれない。天皇が現人神として担保していたものは超越的理念ではないが、教皇が担保しているのは超越的理念である。天皇が現人神であるか否かに一喜一憂するのは、むしろ今でもアメリカであり、平気で官公庁文書に「平成二〇〇〇年」と記述する日本の官僚や政治家であるかもしれない。

「先の大戦で日本が勝つたとしても、日本刀で戦つて勝つたのならまだしも、西洋の軍事技術を駆使したのだから、勝つてもほとんど喜べなかつたであろう」と三島由紀夫が述べたのと同じで、ビン・ラディンとテロリストたちは旅客機を使つて勝つたとしても、確かに喜べないのである。

そこに現代テロリズムの空しさがある。ただし、少なくとも僕にとつては、ビン・ラディンの思想やイスラム原理主義がアメリカ市民宗教社会型キリスト教よりも横暴であると断言する勇氣は、ないのであつた。

戦前及びバブル崩壊・湾岸戦争までの日本のイスラム研究家が、なぜ「日本の多神教的・東洋的実存は、アッラーとは親和するが、イエス・キリストとは親和しない」として、イスラムを「東洋」の版図に入れたか、肌で理解できる日本人は、今は多くはないと思う。私自身も理解できていないのだろうけれど。

第四部 中村雄二郎

二〇一一年六月十九日 起筆、擱筆、公開

■おすすめ著作

『共通感覚論』 『共通感覚』（著作集 第一期 V） 『感性の覚醒』  
『哲学の現在』 『場所トポス』 『共振する世界』

日本の哲学者の中で、明確に「共通感覚」の語を用いて共通感覚を「哲学した」のは、この人くらいだと思う。氏には『共通感覚論』という著書がある。

私は「我々現代人における共通感覚の減衰は、デカルト的自我の発見に端を発する」という言い回しをよく使うが、原著の枠組みは、私の考え方と同じベクトルを向いていると思う。

デカルトの言うコモン・センス（センス・コムニニス）は、元々「常識」という意味と「心身相関の場所」という意味を兼ね備えていた。ところが、デカルト以降「共通感覚」の分裂は進み、今では前者の意味こそが常識的な「常識」であり、後者は切り落とされていくというところに行き着く。

デカルト的自我による強硬な真理追究を批判して登場したヴィーココこそ、西洋近代の共感覚研究において私が肯定的に注目する人物

であるが、ヴィーココのいわば「真理と事実の相互置換性」は、傍流に追いやられるしかなかった。

私は、「共通感覚がある対象を認識するためには、共通感覚が精神によつてすでに作られていなければならぬ」と考えているから、ヴィーココと私の共通感覚的な認識論は、反デカルト的であると言えるのだと思う。

ところが、著者の中村雄二郎氏は、現在の生理学の言う「共通感覚」を原著「共通感覚論」の中にうまく位置づけることができなかつたとはつきり書いている。私としても、原著の「共通感覚」の歴史的分裂過程のとらえ方はほぼ完璧であると感ずるのに、「共通感覚」への理解には少し疑問を持つてしまった。

日本の共感覚者で、もし哲学的思索に慣れている人がいるなら、この書を読めば、「共通感覚を持たない哲学者が共通感覚を論じると、どこで壁にぶつかるか」がありありと分かるから、読んでみるとよいと思う。

中村氏の「共通感覚論」は「共通感覚」ではありえなかつたということなのかもしれない。それは、デカルト以前の「共通感覚」を物理的・実体的な脳局在説への反論として用いなかつたからでもあると思う。

「共通感覚」自体が「共通感覚」による認識でしかとらえられないといった、私が目指したいタイプの共感覚論の萌芽のようなものは、原著からはあまり感じられなかつたが、それでも全体としては、氏の共通感覚哲学の方向性は正しいと思う。



## 第五部 ニーチェ

二〇一一年六月二十日 起筆、攔筆、公開

### ■おすすめ著作

『音楽の精神からのギリシア悲劇の誕生』 『反時代的考察』 『悦ばしき知識』 『ツアラトウストラはかく語りき』 『善悪の彼岸』 『道徳の系譜』 『力への意志』 『生成の無垢』

私がニーチェを初めて読んだのは「8歳のときで、このときからすでに、「自分の共感覚を衰えさせずに今の社会を生き続けることができるか」というように、自分の知覚と現代社会との間にある齟齬を自覚的に哲学的問題として取り上げていたように思う。

最近また、巷でニーチェが流行しているようだが、これは自己の実存を脅かす脅威への対抗としてではなく、実利的問題の処理方法として読まれているようである。

例えば、「どんなに就職活動を頑張っても、内定取り消しに遭うこととはある」ことを社会から見せつけられた若者は、「不遇の永劫回帰」を徹底的に意識にのぼせながらもなお生き抜いたニーチェに、簡単に共感する。もつとも、私にもこの心境は分かるのである。

問題は、今の日本人のほとんどは、実利の問題が浮き彫りになら

ない限りニーチェ的であり得ない、という点ではないだろうか。このたび東日本大震災が起こり、再び自己の実存・根源的生命と実利の問題とがピタリと寄り添うことになった。しかし、それでも、「助け合い」や「絆」といった、初歩的な単語だけが独り歩きしている甘ったるい短期的なブームは、ニーチェの崇高な思想とは遠いところにあると感ぜられる。

戦後のほとんどの時期は、実利の喪失は実存感の喪失ではなかったし、そもそも高度経済成長のおかげで実利の喪失自体もあまりなかった。少なからぬ日本人が、実利の喪失への抵抗を実存感の喪失への抵抗無しに行うようになった。こうして、自己の実存感の喪失への不満無き実利の喪失への不満が完成を見たために、簡単に「キレる」（＝すぐに他人に腹を立てる）人間が増えた。

しかし、ニーチェという人は、それとは対極的な真の温かさを持つていた人であったと、私は感じている。

### 第三編 三十歳〜三十九歳

#### 第一部 剣を持たずペンで書いてみるだけの私のイスラム観

二〇一五年一月二十三日 起筆、攔筆、公開



《井筒俊彦》 Thoha, Anis Malik, ed. (2010) *Japanese contribution to Islamic studies: the legacy of Toshiko Izutsu interpreted.* IIUM Press, Kuala Lumpur.

宗教・宗教論については、メインブログでもたびたび書いてきているが、昨年の五月十五日に、この第二ブログで書いた「井筒俊彦生誕百周年」という記事を今読み返して見たところ、これが一番私のイスラム観の適度な概要の説明にもなっていると感じたので、もう一度自分で自分のイスラム観を確認し直す意味も兼ねて、リンクしておこうと思う。

「井筒俊彦生誕百周年」

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-ningengaku-blog/96590029.html>

当然ながら、日本人の人質二名（後藤健二氏と湯川遥菜氏）の拘束のニュースに関連しての反応として、井筒俊彦や大川周明の著作や自分の記事を読み返してみたわけである。むしろ、こういうときにいつも考えてしまうのは、良し悪しは全く別にして、現地に赴くカメラマンやジャーナリストの関心の対象や自己の脳が欲している自己の行動と、宗教学・宗教論上の思案・思惟そのものに重点を置いてしまう自分のような人間のそれらとが、全く違うのだという点である。それは、敬意と違和感のどちらでもある。

ところで、イスラム国が目指しているとされる最大版図を見ても、西はイベリア半島、東はインドやウイグルの居住地域にまで至っているから、過去にイスラム勢力が一度でも征服したことのある土地全てを再征服することが目的のようだ。ナスル朝のグラナダ陥落によるレコンキスタ終結以前およびムガル帝国以前を版図の理想とし、いわゆるイギリスの「三枚舌外交」以前のオスマン帝国を統治体制の理想としているようである。

もっとも、昨年の私の記事は非常に言語論寄りで、イスラム教徒の自己そのものやクルアーン・アラビア語そのものに対する日本人としての思惟の態度を示したものである。井筒俊彦の「言語アラヤ識」や大川周明の洞察眼とチョムスキーの「生成文法理論」との比較を主に書いていて、その上で、彼ら賢明な日本人が「SAE (Standard Average European = 標準平均欧州言語) に基づく従来の優勢学的言語学」への反骨精神をクルアーン・アラビア語の中に見たという「予感」を、私自身が彼らの著作やクルアーンから感じ

たということ述べたものである。

私が、昨今の日本の店頭に並ぶビジネスマン向けの仏教書が語る  
仏教よりも、井筒俊彦や大川周明のイスラム観、あるいは彼らが出  
会ったイスラム教そのものを、自分の多神教的・仏教的あるいは神  
道的実存の仕方に近いものだと解釈する（いや、感じ取っている）  
態度は、決して偶然的産物ではなく、多分に論理的で平和的な態度  
であるという自負を、最近のイスラム過激派勢力の動向を見ていて  
改めて持った。

それにしても、井筒俊彦の愛弟子である五十嵐一氏が殺害された  
悪魔の詩訳者殺人事件のことが、今また個人的に気になっている。

## 第二部 「ISIS（イスラム国）」の呼称論争について思うこと

二〇一五年二月九日 起筆、攔筆、公開

昨日も Twitter で簡単につぶやいたのだが、ここ二週間ほど、日  
本では（特にネット上やイスラム学界・国内のモスクでは）、「イス  
ラム国」の呼称を「イスラム国」・「IS」・「ISIS」・「ISIL」・「DAISHI」  
などのうちのどれにするかで、かなりの論争が起きている。

その中でも、「イスラム国」は圧倒的に不人気のように、少なくとも  
もそれ以外の英語・アラビア語の略語で呼ぶべきだとする意見がほ  
とんどである。日本政府は、すでに「ISIL」や「いわゆるイスラム

国」と呼称することを明言している。

エジプト出身のファイイさんなどのタレントも、Twitter で、政府  
の言う通り「イスラム国」を「ISIL」に変えるよう結構厳しい口調  
で主張している。

こうして、過激派テロ組織について、それこそ過激な呼称論争が  
日本人どうして勃発しているわけだが、これらの呼称は結局、どれ  
も「国」と言っているのであり、呼称の調整がどこまで日本国民の  
誤解・イスラム教差別の防止や対日テロ対策として有意で実効的な  
試みかは不明だと思う。

そもそも、「IS」は「イスラム国」のことであり、「イスラム国」  
は「IS」のことなのだから、これは「言い換え」や「ニュアンス  
の変更」や「イスラム教差別の防止措置」ではなく、日本国内だけ  
の「翻訳問題」や「略語問題」にすぎないのではないだろうか。

これらの呼称の中で、「イスラム国」という訳語を一番問題に感じ、  
イスラム教差別だと思うのは、日本語の分かる我々だけ（日本人や、  
日本語の分かる外国人・イスラム教関係者・ISIS 戦闘員だけ）であ  
る、という点が盲点になりすぎていて、いったい ISIS に腹を立てて  
いるのか日本人どうして腹を立て合っているのか、何だか分からな  
くなってきた。

元より、「イスラム国」と「イスラム国家・イスラム諸国」とを混  
同する日本人があまりに多すぎる（実際に混同しながら発言した被  
害者親族やコメンテーターがいる）という観点からも、呼称の調整  
必要論、訳語の廃止論が出ているのだと思うが、よく考えてみれ

ば、これは言葉のせいではないと思う。

テレビやスマホで「イスラム国」という表記を初めて見たときに、「待てよ、そんな名前の国があったかな。イスラム国家ともイスラム諸国とも、何だか違うようだな。もしかして、そういう固有名詞を名乗る何らかの組織・集団かもしれない。調べてみよう」というくらいの注意力があつたかなかったかの問題で、政府や世の中が呼称を変えたところで、呼称の変更自体に気づくのもまた、そういう注意力がある人だけなのだから、残念ながら、ほとんど不毛な議論ではないかと思っている。

「ISIS」と「ISIL」の違いは、最後が「al-Sham」か「the Levant」かの違いだが、私は一応、ブログでは、アメリカ政府や日本政府の「ISIL」ではなく、CNNなどの海外メディアの「ISIS」を使うことにしている。

また、「DAISH」 という語には、ISISが嫌悪するニュアンスが含まれており、実際にISIS側のメディア「フルカーン」もそう呼ぶなと反論しているが、どうやら組織の総意というわけではなく、単なる一部の戦闘員の好みの問題のようで、「ISIS」・「ISIL」の穏健なニュアンスを大きく覆すには至っていないようである。

従って、

(1) 日本国内での呼称は、「イスラム国」・「ISIS」・「ISIL」・「DAISH」のいずれであろうが、どの過激派組織を指しているか、そして該当組織が国際犯罪組織であることが、国民の「知る権利」の範囲で分かっていけばよい。

(2) 「イスラム国」と「イスラム国家・イスラム諸国」との区別が付かないのは、区別が付かない人自身の問題であり、日本の反政府系マスコミがISISの印象を良くし政府を批判するための策略として「イスラム国」の呼称を頑なに変えていないのだという説は、（そもそもこれが国内の翻訳問題や略語問題で、印象操作自体が不可能である以上）現時点では信憑性に欠けるようだ。

私が現在感じるところとしては、以上のようなことだ。

ところで、かつて私が学んだ山内昌之先生などは、「イスラム国ではない、イスラム国だ」と怒っていらっしやるかもしれない。